

「落語と私」 その拾式

三代目 橋ノ百圓

十五、神奈川宿(朝這い)

圓(扇馬)師匠から付けて貰った、十六の噺も残り二ツとなりました。この神奈川宿ですが、落語好きな方でも、余り聴いた事のない噺だと思います。圓師匠は、小金治さんからと言ってましたが、現在何人の噺家さんが演じるかは分かりません。

「あらすじ」

この噺は長い※「三人旅」の中の一話です。三人旅の発端は、義理で入った無尽に当り「江戸ッ子の生まれ損い金を貯め」の時代、その金を何ンとか遣うために、仲の良い三人で京見物に行くと言う事になり、その第一の泊りが神奈川宿です。「戸塚泊りはまだ陽が高い、駒を早めて藤沢まで」何ンてエ言葉が、只今でも残っておりますが、で始まります。圓師匠曰く「そんな言葉ア今、残っちゃいないヨ」お江戸日本橋七ツ発ち、早朝四時に江戸を発ち、十二里も先に有る藤沢の宿まで、陽の暮方には着くと言うのですから、当時の人は健脚だった訳です。この三人は、物見遊山の旅ですから、神奈川で宿を取る事に決めると、羽沢屋の番頭に宿を薦められますが、中の一人が「去年盆山の帰りに、この宿場に泊ったんだが、チョイト因縁の付いた宿が有る」と羽沢屋に泊るのを渋るので、兄貴分が「ヨシ、お前のその因縁話てエのを伺おうじゃねエか」と、この銀次なる者が話し始める「去年盆山に来たのが、俺を入れて五人、半端な時間にこの神奈川宿に入っちゃったんで、ここに泊って、明日の朝、早発てエ事にして、宿を決めて湯に入って、飯てエ事になり、お給仕に来たのが、お月観女中」「何ンでエそのお月観てエのは?」「顔が真丸で鼻が団子ッ鼻、両方の頬端が柿の色、頭髮なんざアバサバサッと薄頭(中略)この女中が『この神奈川にも、綺麗な女の子が居ますので、お遊びになったらいかがですか』てえんだヨ、じゃあ、そうしようと決まり、女中が四人連れて帰って来たのを見て、俺ア驚いちゃった、良い女なんだヨ」「エッ！お前達五人連れだろ、一人足りねエじゃねエか!」(中略)「そこで俺が言ったのは、一人足りねエんだったら、女の子に選んで貰おうじゃねエか」「張り店のあべこべかア」(中略)「誰かお茶ア碾いたのが居るネ」「居るヨ」「誰だ!」「俺だ」「エッお前エがお茶碾いたのかヨ」「問抜けな話しなんだヨ、俺が言い出したんだから諦めて、一人で寝ようと思ったら、相次の奴に嫌味を言われて思わず、熱燗を五、六本引ッ掛けて、下の帳場へ飛び込んで、啖呵ア切つてると、止めに入ったのが、この宿の遠縁にあたるお梅ちゃん、これが又、馬鹿に良い女なんだヨ『私のお詫びで叶うのでしたら、どうぞ堪忍してください』てえんだヨ、じゃあてえんで、上で二人で飲んでると、お梅ちゃんが『下に一人で寝てますから、四ツ(十時)の鐘を合図に



葛飾北斎 東海道五十三次 小判横絵 文化年間(1804~17)
出典：<http://www.city.odawara.kanagawa.jp/encycl/ukiyoe/05/05-04d.html>

来て下さい』と約束をしたんだが、時が気になって眠れねえんだヨ、その内グッスリ眠っちゃって、女中の雨戸を開ける音で目を覚まして、それでも、お梅ちゃんの部屋へ這って行くと、お梅ちゃんは居なくて、朝の膳が据えて有って『この食事を済ませて、仲間の四人さんと、足元の明るい内にお帰えんなさい』と伝言が在った女中が言いやがったヨ」「可哀想になア、お前エ振られちゃったんだヨ、お前も江戸っ子だ、尻を捲って、お膳をポーンと蹴倒して、啖呵の一寸も切ってやったか!?」「お飯マ喰っちゃった」「そんなもん、喰うんじゃないヨ」「据え膳食わぬは男の恥」。間抜け落ちです。長い旅噺の一話ですから、無理に落げを付けた様な感じです。

「圓師匠の説明」

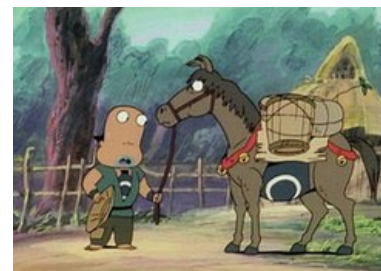
圓師匠が教わった時の落げは、夜が明けても、お梅ちゃんの部屋へ這って行ったとの話に「お前エの話は、締まらねえや、陽が射して居るのに這って行く事は無えだろ」「朝這」だったそうですが、それでは半端なので「据え膳食わぬは男の恥」、この落は、俺が考えたんだと胸を張ってました。ですかネ!? 圓師匠曰く、旅の噺は導入部から、お客様を旅の中に誘い込む様に、「戸塚泊りはまだ・・・」からノンビリとした旅の風情を出す様に、又、五人の張り店の時に、銀次が俵張りの煙管を目八分に構え、グッと反身になる処は、立膝に成り、チョイト自慢化に形良く遣れと言ってくれました。噺の盛り上げは、お梅ちゃんとの出会いの処と、銀次が目を覚まして下に降りて行く辺から、流れ良く、序々に盛り上げる様にと教わりました。この噺は、平成14年に付けて貰いましたが、私も2回ほどしか高座に懸けておりません。やはり、遣手が少なくなる噺には、それなりの理由が在ると思います。テカ!?

十六、馬の田楽

圓師匠からの噺も最後の「馬の田楽」となりました。この噺は、何ンとなくノンビリとした、田園風景と、田舎の人の人の好きが好きで、圓師匠の持根多を承知で、お願いしたのですが、師匠曰く「あの噺は、忘れちゃったヨ」と、わざわざ自分が教わった、今輔師のCDを買って来てくれて「これで覚えろ! 仕上げは俺が見てやるから」と、相對の稽古では無かったのです。平成23年ですから、圓師匠も74歳、お稽古も疲れるのでしょうネ。そこで私は、知り合いのK、T師に相談に乗って貰おうと、連絡を取りました処「小疇さん、何ンでそんな噺をするの!? あれ登場人物全て、田舎の人じゃない」と言われ、相談どころでは無くなってしまいました。しかし、噺家さんは、優しい人が多く、直ぐに、小さん、小三治、今輔、文生各師匠方の「馬の田楽」の入ったテープを送って来てくれたのです。大いに参考になり、今でも感謝しております。江戸っ子を自負する噺家さんは、登場人物全員田舎の人は、割と嫌いますネ。

「あらすじ」

重い味噌樽二ツ背に着け、峠を二ツ越えて漸く三州屋に着いた馬子が、馬を店の前に止め、何ン度も中に呼び掛けるが、誰も居ない様子、仕方なく、一服点けて居ると、いつの間にか居眠りをしてしまい、気が付いたら一時間! 慌てて起きると、三州屋のお爺がそこに居るので「俺アサッキから、呼ばとるでねえか」「イヤ、良く聞こえたよう、裏の畑で大根の種蒔いとったで、土が黒くて、途中で止めると、何処まで種蒔いたか分ンなくなるで、種蒔き終



出典：アニメ落語館 1 馬の田楽
https://www.videx.jp/detail/anime/v_a_ajiado/aasa0001_0001/index.htm

るまで、留守番頼んだよ」「駄目だよ、馬ア疲れちまうベナ、味噌二樽積んどるだから」「味噌二樽、そりゃ俺ア所じゃねえ」「毫碌しちやあんねえネ、判取り見てくらっせ」と、おん爺が判取帳を見て「こら、俺所じゃねえ、三河屋だよ」「エッ！丸三と角三を間違えたか。(中略)どうすべ」「なら、こうしろや」と、良い知恵を授けて貰い「じゃあ、そうすべ、先イ荷降すヨ」と表へ出ると、繋いで在った馬が居ない「何!? 馬が居ねえ、ハバカリでも入ってねえか?」これから馬子は、馬を捜しに駆け出す。始めに馬を繋ぐ時に近くで遊んでいた悪餓鬼に訊くと、蜻蛉釣りにと、馬の尻尾を抜いたので、馬が驚いて何処かへ行っちゃった、との事、馬子は、早く馬の荷を降してやろうと捜し回り、次に訊いたのが畦道に立って空を見て居る極気の長い人「走り馬見なかったかネ!」と訊くと、長々と話した挙句「俺ア今ここに出たばかりで分らねえ」ときた。その次が店番をして居る、耳の遠いお婆さん。会話が噛み合わない処に「今日は味噌の加減が良えで、芋に味噌付けベエか?」「何言っとるだヨ、味噌付けベエって、俺ア芋の田楽の話イしとるでねえヨ」と、呆れて表へ飛び出すと、大いに酔った虎十に会ったので(中略)「お前エ俺とこの馬知らねえか」と訊くと、頓珍漢な返事「この野郎酔っ払ってやがって、味噌付けた馬ア知ってるかちいだ」「何イ味噌付けた馬だ、アッハハハ、俺アこの歳に成るまで、馬の田楽は喰った事ねえ」ぶっつけ落ちです。

「圓師匠の説明」

CDで覚えると言ったくらいですから、細かな説明はなかったです。只、話し始めの馬子唄から、お客様をノンビリとした田舎に連れて行くように、だから、馬子唄が歌えなければ駄目だ!「俺は歌えない」この辺がCDに成ったのかナ!? 又、馬子の手綱の持ち方、馬との目の位置、馬を捜す時は心は急ぐが、そこは何処かノンビリと、子供との会話も、本気で怒っちゃいけない、と言われました。“何んだ、チャンと教えてくれますネ”これで圓師匠直伝の十六の噺を終わります。皆様、良いお年をお迎えください。

「落語豆知識」

※「三人旅と旅の噺」

三人旅は「発端」から次が「神奈川宿」、道中馬子に薦められて馬に乗る「ビッコ馬」何ンとか小田原の鶴屋善兵衛と言う旅籠に着き、飯を食べ、お湯に入るまでが「鶴屋善兵衛」その宿で、お女郎買いをするのが「おしくら」三人の所へ二人しか来ないので、一人は比丘尼ではと言われ、大変なお婆さんが遣って来るのが「尼買い」伊勢詣りを終えて、三人で京見物、ここで金を遣い果たすまでが「京見物」。二人は江戸に帰り、一人残った男が祇園祭りに誘われて、伯父さんの友達と、お国自慢で言い争いになるのが「祇園会」です。落語の旅は、東海道が多く、昔は旅に出るのも大変でしたので、旅の噺が受けたと思います。